

## 万緑の中に燃え尽きる哀切——「頼政」——

森まり子

「天雲の稲荷の社伏し拜み、稲荷の社伏し拜み、猶行く末は深草や木幡の関を越え過ぎて、伏見の澤田見え渡る水の水上尋ね来て」、宇治の里に着いた遠国からの僧（ワキ）があつた。時は五月の末、五月雨の降り注ぐ中に草木はいよいよ深く、田の緑も鮮やかに冴える季節である。里人（前シテ）に名所を教えられつつ、僧が宇治川のせせらぎに耳を傾けるうちに月がさし上る。「月こそ出づれ朝日山、山吹の瀬に影見えて、雪さし下す島小舟、山も川も朧々として、是非を分かぬ景色」の中、湿り気を含んだ夕べの大気が草木を一層深く匂い立たせる。清明な趣の中に、昔日の合戦でこの地に最期を遂げた老将、源三位頼政（後シテ）がいにしえを懐古する舞台が整う。

里人にいざなわれて宇治の平等院の釣殿近くの庭にある「扇の芝」を見た僧が謂れを問うと、里人は「これは昔宮戦のありし時、源三位頼政合戦に打負け給ひ、扇を敷き自害し果て給ひし處なり、されば名将の古跡なればとて、扇のなりに取残し、今も扇の芝と申し候」と説明する。しかも「其の宮戦の月も日も今

日に當りて候」と言うのである。この里人は頼政の幽霊なのであるが、名乗りもあえず消え失せてしまう。中入後、後シテが老将頼政の姿で現れ、宇治の橋合戦と享年七十六歳の自身の最期を語り、僧に回向を乞うて扇の芝の草蔭に消えてゆく。

世阿弥の修羅物である「頼政」は、桜の花びらがふるえ、千歳の松や杉を夜半の嵐が吹きすぎるような詞章そのものの幽玄美には欠けるが、逆に脚色をそぎ落とし、明澄に引き締めた文体で老将の悲運を浮かび上がらせる名曲である。しかしこの能の深さは、やわらかな光に包まれた蒼穹はどこまでも透明で青く、その見上げる先に可能性が無限に広がっているように感じられる日々には分らない。志は無限であつても、それを遂げる時間は無限に残されてはいない。その事を知る年代になつて初めて切実に感じられる感情が、この能の中には流れている。

中入後、後シテである頼政の幽霊が現れ、頼政が以仁王<sup>(三)</sup>を奉じて平家に対して挙兵した経緯が明らかにされてゆく。

(地謡) 抑々治承の夏の頃、由なき御謀叛を勧め申し、名も高倉の宮の内、雲居のよそに有明の月の都を忍び出でて(シテ) 憂き時しもに近江路や(地謡) 三井寺指して落ち給ふ。

しかし以仁王は前夜「御寝ならざる故」に「六度まで御落馬にて煩はせ給ひ」(地謡)、宇治の平等院で休息する事を余儀なくされた。かくして平家の差し向けた追討軍との「橋合戦」が、折しも五月雨で増水

した宇治川で繰り広げられる事になる。「入り乱れ、我も我もと」戦う有様の活写は、この能のもととなった『平家物語』巻第四「橋合戦」の描写を正に彷彿とさせる。「(シテ)かくて源平の兵、宇治川の南北の岸に打臨み、鬨の声矢叫の音、波に類へて夥し」。しかし頼政軍に不利に戦は推移した。頼政は、今ほこれまでと思ひ定め、辞世の歌を残して宇治の平等院で自害して果てる。

埋木のはなさく事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける

〔『平家物語』巻第四「宮御最期」〕<sup>(五)</sup>

頼政の辞世の歌を初めて知った少女の頃以来、最近まで私は、武運つたなく果てる身を惜しむ歌であると素朴に理解していた。しかし客観的に見れば、平家全盛の時代に頼政は、武士の身としては異例の従三位まで昇り、「文武に名を得し人」(ワキ)としてもときめいたのである。にもかかわらず、何故、「はなさく」事も「実のなる」事もない「埋木」なのか。かつての私はそこに何の疑問も感じなかった。

歴史上の源頼政は、歌人として知られると共に、政治においては野心家の一面があったという。「埋木」という表現は単なる野心の裏返しであるという突き放した見方もできよう。

しかし、野心と志は紙一重である。特に男の場合は往々にしてそうであり、人を魅力的ならしめるものでもある。野心は否定すべきものである、とは私は思わない。

頼政のいう「埋木」とは、必ずしも客観的に、世間的に見ての事ではない。むしろ自らの内面の理想、生涯抱き続けた彼なりの志に照らしての、最後の厳しい自己総括ではなかったか——今の私にはそう思われてならない。

それは、若き日に「青雲の志」を抱いた事のある者のみが語り得る、また了解し得る、重い言葉ではなかったか。

その志は、七十六年の生涯の中で不変ではなかったとも推測される。頼政には、保元・平治の乱の後は源氏の中でただ一人、平氏という時の権力に妥協して昇進を果たした、したたかさもあった。

しかし『平家物語』によれば、頼政はしたたかではあっても、卑屈ではなかった。頼政の謀反の一つのきっかけは、息子仲綱が、所有する「木のした」という名馬をめぐって平宗盛に辱められた一件であったという。

・ ・ ・ 伊豆守「仲綱」これ「木のしたを手ひどく扱う事によって宗盛が自分を侮辱したこと」を伝へ聞き、「身にかへて思ふ馬なれども、権威についてとらるゝだにもあるに、馬ゆゑ仲綱が天下のわらはれぐさとならんずるこそやすからぬ」とて、大にいきどほられければ、三位入道「頼政」これを聞き、伊豆守に向つて、「何事のあるべきと思ひあなづつて、平家の人どもがさよしのしれ事を言ふにこそあんなれ。其儀ならば、いのちいきてもなにかせん。便宜をうかゞうてこそあらめ」とて、わたくしには思ひも立たず、宮をすゝめ申たりけるとぞ、後には聞えし。

〔『平家物語』卷第四「競」六〕

栄達のみを望む人であれば我慢もしたであろう。しかし頼政は、一門の者に加えられた侮辱に「いのちいきてもなにかせん」とまで憤り、折を見ての復讐を誓う気骨の持ち主でもあった。宗盛が木のしたを欲しがっていると聞いた頼政が「たとひこがねをまろめたる馬なりとも、それほど人のこはう物を、をしむべき様やある。すみやかにその馬、六波羅へつかはせ」と、気の進まぬ仲綱に命じて宗盛に愛馬を差し出させた次第を『平家物語』は描いている。その経緯の通りであれば、良識と礼節を尽くしただけに憤りも一入であろう。傲慢に対しては相応の対応をするという、筋を通す生き方の結果の総括が、「埋木のはなさく事もなかりしに」という辞世に凝縮されたのだとも言える。志は果たせなかった。しかしこの歌には無念こそあれ、弁明は一切見られない。

同じ様な状況下での武人の最期を比べる時、例えば『史記』の「項羽本紀」に描かれた項羽はこの点で対照的である。

力 拔 山 兮 氣 蓋 世

時 不 利 兮 驩 不 逝

驩 不 逝 兮 可 奈 何

虞 兮 虞 兮 奈 若 何<sup>(心)</sup>

垓下で包囲された若き武将の、ロマンティシズムと悲壮感の漂うあまりにも有名な辞世の詩の中で、私が一抔の違和感を覚える箇所があるとすれば、それは「時不利」という一語である。顧みれば項羽は、「鴻門之会」など成功の機会はあるながら、それを逸した事もあった。それらを含めた自らの判断の誤りを責

めずして、時代の趨勢や運命のせいにする。敗者である項羽の栄光と悲哀を、自身の人生における失意と重ね合わせつつ歴史の中で同情的に見つめた司馬遷も、あえて「高祖本紀」の前に置いた「項羽本紀」を締め括るにあたって、こうした項羽の精神のあり方を冷静に批判する事を忘れない。「自矜功伐。奮其私智而不師古。謂霸王之業。欲以力征經營天下。五年卒亡其國。身死東城。尚不覺寤。而不自責過矣。乃引天亡我非用兵之罪也。豈不謬哉。」（『史記』「項羽本紀」<sup>九</sup>）

頼政の場合は、後から見れば彼の戦が平家の栄華を傾かせる境目になったとはいえ、個々の拳兵としては尚早であったかも知れない。頼みにした延暦寺も興福寺もいまだ加わらない（山門は心変わりしつ、南都はいまだ参らず<sup>一〇</sup>）という戦略上の不運もあった。この戦においてこそ、「時不利」の状況は明らかであったと言えよう。

しかし「埋木」の歌は、それをあえて言わない。

言わないからこそ、「時不利」という、頼政が最期まで自分一人の胸にとどめた無念と哀感、敗者の言い訳によって晩節を汚さぬと思ひ定めたであろう老将の侵しがたい品格が、後世の者の胸を強く打つのである。

頼政が自害に至る模様を、「頼政」の詞章は次の様にうたう。

・ ・ ・ (シテ) 頼政が頼みつる (地謡) 兄弟の者も討たれければ (シテ) 今は何をか期すべき  
と (地謡) 唯一條に老武者の (シテ) これまでと思ひて (地謡) これまでと思ひて平等院の庭  
の面、これなる芝の上に、扇を打敷き鎧脱ぎ捨て座を組み、刀を抜きながら、さすが名を得  
し其の身とて

(シテ) 埋木の、花咲く事も無かりしに、身のなる果は、哀なりけり (三)

ここまでの所を、『平家物語』はより詳しく描いている。

三位入道は、渡辺長七唱を召して、「わが頸討て」とのたまひければ、主のいけ頸討たん事  
のかなしさに、涙をはらくと流いて、「仕ともおぼえ候はず。御自害候て、其後こそ給はり  
候はめ」と申ければ、「まことに」とて西に向ひ、高声に十念唱へ、最後の詞ぞあはれなる。

埋木のはなさく事もなかりしに身のなるはてぞかなしかりける

これを最後の詞にて、太刀のさきを腹につき立て、うつぶさまにつらぬかつてぞ失せられけ  
る。其時に歌よむべうはなかりしかども、わかうよりあながちにすいたる道なれば、最後の時  
も忘れ給はず。その頸をば唱取つて、なくなく石にくりあはせ、かたきの中をまぎれいでて、  
宇治河のふかきところに沈めてンげり。

(卷第四「宮御最期」)

『平家物語』の描写がリアルであるのに比べ、謡曲は芝の上に扇を敷く情趣を添え、死にまつわる生々

しさの描写を控えているように見える。簡素に引き締められた能の詞章に、その下敷きとなった古典の原文を重ね合わせて鑑賞した人々は古来多くいたであろう。芝の青さと、ほとばしる鮮血の赤の壮絶な対照。いつまでもほの明るい薄暮の中で、ものみなすべてに夏に向かう力強い生命が脈打つ、そのような万緑の季節のもなかに迎える死の不条理と限りない哀切。観客の間の古典の共有あつてこそ、命を謳歌する草木のしたたるような緑が、終焉の悲劇性を一層際立たせている光景の想像も成り立つたと思われる。

「頼政」については近世の演能記録が残っている。寛永年間の一部を記すと、寛永四年の五月と七月に水戸の徳川頼房邸で、同五年の六月に尾張の徳川義直邸で、同六年の九月に江戸城本丸で、同七年の二月に紀伊の徳川頼宣邸で演じられている。<sup>(三)</sup> 太平の世にあつても人の世の不条理、そこから生ずる内面の風は変わらなかつたはずである。長く生きれば実現したであろう可能性が想像される若き以仁王ならいざ知らず、齢七十を超えた自分はその年齢まで生きたのであるから、志を果たせなかつた責任はあくまでも自身にある、弁明はせぬ、という誇り高い覚悟がにじむ頼政の辞世。序列を守つた座で静かに観能する徳川の世の武士の心に、「埋木の」という最後の謡の悲愁はどのように響いたのであろう。

芸術への高い志を抱きつつも、後半生は佐渡への流謫も含めて不如意であつた世阿弥自身が、自らの人生への感懐を頼政のそれに熱く重ね合わせる要素もあつたのではないか。今の私にはそのようにも想像さ

れる。

私自身は「埋木の」というシテの謡に、暗闇の中にもされた篝火が、消える直前に大きくゆらめいて燃え上がるような作者の情念が胸に迫るのを覚えずにはいられないのである。オペラの様な絶叫ではない。くぐもった声でうたわれる抑制された表現である。にもかかわらず、限りある生の中で芸術への志を貫こうとした、しかし自然の摂理として理想はいつか未完で終わらざるを得ない、その不条理を深く自覚した世阿弥が、自らの物理的な死と引き換えに永遠の生命をもってこの作品に宿っているかの如くに感ぜられ、私自身の学者としての人生や理想を重ね合わせた時に、深い共感と静かな感動を禁じ得ないのである。数ある世阿弥の作品（とされるものも含めて）の中で、世阿弥自身が、その魂が、そして「不朽」という事の意味が、これほど胸に迫る能を私はほかに知らない。

『平家物語』にある頼政の亡骸の処理など、具体的な事柄の一切をあえてそぎ落として、能「頼政」は挽歌の響きを帯びる詞章によって閉じられる。

（地謡） 跡弔ひ給へ御僧よ、かりそめながらこれとても、他生の種の縁に今、扇の芝の草の蔭に、  
帰るとて失せにけり、立帰るとて失せにけり。

一旦は覚悟して運命を受容したが、その後も、在りし日の自身の輝きと末路の悲哀を思い起こしては苦しむ。人間の弱さから来る魂の苦しみ、なまじ輝きを経験したからこそ痛感される悲哀、未練を残して暗

く燃え上がる情念は回向によって和らいでも、シテの消えゆく先の草蔭の闇に、悶えるような苦しみへの本質的な解決はないままである。雨がしとしとと降る、月のない万緑の頃の夜闇は、ただでさえ深い。しかし炎が大きくゆらめいて一瞬燃え上がり、ふっと燃え尽きた後に広がる闇は、篝火がともされる前の闇よりなお一段と深い事を、改めて観客は知る。

しかし、またこうも言えようか。

—その深い闇があるからこそ、輝きであると。

燃え尽きる定めであるからこそ、最後の瞬間に燃え上がる炎の輝きが永遠に刻印されるのだと。闇があつてこそ、最後の刹那の輝きに、未完という宿命を超えた意味が宿るのだと。

そしてその輝き——衰え、薄れてゆく炎の最後の深い輝きに永遠を見るからこそ、燃え尽きるという不条理を「摂理」として、人は受け入れるのだと。

シテが橋掛かりを渡つて消えた後に取り残される観客の周りには、静寂の支配する無常の闇がただ広がるばかりである。そこには、頼政と同時代を生きた中世ヨーロッパのキリスト教世界の騎士たちが、聖者と共に自らの魂が迎えられる事を深く信じて臨終を迎えた、この世の不条理を補つて余りある、光あふれる天国はない。

いつかはと知りながら、その闇を受け入れる用意はまだできない。残照をほのかに残して冴えわたる群青色の冬の空の、永久に届く事のない孤高の高みにある星が静かに放っている、あの崇高な美しい光への執着が胸の奥に燃えるのを、時折自覚するからでもあろうか。

(平成二十七年三月二十日 国立能楽堂 定例公演 喜多流)

#### 註

- (一) 本稿における能「頼政」の詞章は、次の喜多流稽古用完本に拠った(漢字は原則として新字体に改めたが、旧字を残した箇所もある)。喜多節世著『頼政』喜多流刊行会、平成二十四年。また『平家物語』の原文は次の校訂本に拠った。梶原正昭・山下宏明校注『平家物語』(一)～(四)、岩波書店、二〇〇八年。以下、『平家物語』からの引用は題名と頁数のみで示す。
- (二) 源頼政(一一〇四～一一八〇)。平家全盛の中で昇進し、治承二年、平清盛の執奏により従三位に叙せられる。同三年、剃髪して源三位入道と呼ばれる。以仁王を奉じて挙兵するも失敗し、宇治の平等院にて同四年五月二十六日に自害。旧暦五月二十六日は、今の暦では六月二十日頃に当たる。
- (三) 高倉宮以仁王(一一五一～一一八〇)は後白河天皇の第二皇子。第三皇子との説もある。享年二十九歳。
- (四) 平家方の上総守忠清の言葉に「いまは河をわたすべきで候が、をりふし五月雨のころで、水まざって候」とある(『平家物語』巻第四「橋合戦」)。
- 『平家物語』(一)、九四頁。

(五) 『平家物語』(二)、一〇四頁。

(六) 『平家物語』(二)、五六頁。

(七) 同右。但し文学作品である『平家物語』における頼政像は、歴史上の頼政の実像と異なる可能性がある。

(八) 本稿における『史記』の原文は次の校訂本に拠った(漢字は原則として新字体に改めたが、旧字を残した箇所もある)。司馬遷著、田中謙二・

一海知義解説『史記 楚漢篇』朝日新聞社、昭和五三年。以下、題名と頁数のみを註で示す。『史記 楚漢篇』、一一〇頁。

(九) 『史記 楚漢篇』、一二三頁。なおこの部分の大意は次の様である。「我と我が功を誇り、彼一人の知恵を信頼しすぎて、先人や歴史の教えを手本とせず、これこそは霸王のする事だと思い、武力戦争によって天下を統一しようと欲したが、五年にして遂にその国を滅亡させ、その身は東城に死ぬ事になったが、まだ目が覚めず自分の過失を咎めずに、天が自分を滅ぼすのであって武力に訴えたせいではないと主張する。これは間違った事ではないか。」

(一〇) 『平家物語』(二)、八六頁。以仁王が三井寺を出る時の言葉。「山門」は比叡山延暦寺、「南都」は興福寺を指す。

(一一) この歌については、能の謡本と『平家物語』の間に異同がある。

(一二) 『平家物語』(二)、一〇四頁。

(一三) 喜多、『頼政』、冒頭の解説。

「随想」統篇(予定の一部、順不同、副題省略)  
能楽随想(二三) 春や昔 移ろわぬ恋と中世  
も、の花さきでうつるふ  
あるルネサンス絵画の静謐